本連載における「翻訳」について ⑧

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
加藤　匡人　*Masato Kato*

前回（11 月号）の最後の部分で、タラル・アサドが自身の考える「翻訳」について触れている箇所を引用した。そこでは、翻訳は単純に言葉を別の言葉で置き換えるような「純粋に認知的な行為」ではなく、むしろ「ある文脈の中で、特定の音や像、そこから生じる感情を想起させる表現の複合体であり、行動や態度を現実化するものである」とされていた。そしてその意味で、アサドは翻訳という行為を言葉の置き換えではなく「変形」であると述べている（アサド　2018 ＝ 2021：13–14、傍点は原文ママ）。

アサドはこの考え方を下敷きにしながら、宗教的言語の「翻訳」についての議論を進めていくが、その中でハーバーマスの翻訳の捉え方について批判を加えている。その一つは、ハーバーマスが宗教の「賦活力（inspiring power）」について、それが「世俗の政治システムに必要であると同時に、普遍的な―すなわち世俗的な―言語によって、信仰を持たない人々にもアクセス可能であると考え」ている点である（同上：69）。これは、以前にも紹介したハーバーマスの翻訳の議論、すなわち宗教的市民がリベラルな政治に参加する場合には、宗教的言語が示す内容を誰にでもアクセスできるものにするために、それを世俗的言語に「翻訳」する必要があるという基本的な論点に関わる議論である。

このハーバーマスの議論について、アサドは以下のように述べている。

> 宗教的な「啓示（inspiration）」は、聖なる意図に由来するのだろうか。それとも宗教的な物語の新しい（世俗的な）目的のための人間による理由付けに由来するのであろうか。もっと直接的にいえば、宗教的「啓示」は信仰者に対するのと同じ働きを、非信仰者に対しても持つのであろうか。ハーバーマスは、次のように応答するかもしれない。政治の領域においてのみ、そうであると。しかし、信仰者は、彼らの生活における絶対的な優先性を政治に与えようとはしないかもしれない。そして、宗教的言説が、本質的には世俗の政治的利益の手段であるということを認めようとはしないかもしれない。こうした懸念は否定されるべきなのだろうか。（同上：69–70、傍点は筆者）

ここでアサドは、宗教的な「啓示」が信仰者と非信仰者に対して同じような働きをするのかと問いかけている。そして信仰者はおそらく、自身の拠り所とする宗教的な「啓示」を「政治的利益の手段」に矮小化することは望まないのではないか、という懸念を述べている。

そしてそこから続いて、詩人のＴ・Ｓ・エリオットが、「啓示」という概念を宗教的・世俗的な意味で捉えようとした文章を引用した上で、次のように述べている。

> 彼［訳者注：Ｔ・Ｓ・エリオット］の示すところでは、預言者（「宗教的」人物）と詩人（「世俗的」人物）は、あるものを共有している。それは、真実ではあるけれどもその意味を完全には理解できないものに直面している、という感覚である。啓示の翻訳は（まったく不可能ではないにしても）容易ではない。それはまさに、その言語が多義的であり、不確定であり、不透明であるからであり、また、その限りにおいてである。考えたり行動したりする特定の方法を解放したり固定したりすることによって、例えば、自らの無力さを解消するように応答したり、逆にその無力さを深めたりすることによって、言語が主体に対して正確に何を行っているかは、言語の使用者や聴取者の管理下にあるわけではない。ハーバーマスの翻訳に関する考え方は、あたかも「抽象的な」認知過程において必要とされるような、ある語を別の語と置き換える（あるいは回りくどくいいかえる）ことであるように思える。詩的な言語や預言者の言語に表現される感性的な関わりの要求は、排除されるのである。（同上：70–71、傍点は筆者）

ここでは、以前にも触れた宗教的言語の翻訳不可能性について述べられている。すなわち、啓示はその言語の表現の曖昧さや多義性も相まって、預言者や詩人であってもその意味を完全には理解できないものであり、それは宗教的言語だけでなく世俗的言語である詩においても同様であるという指摘である。

さらに、ここで筆者が重要と考えるのは、上記の引用の最後の方に述べられている二つの指摘である。一つは、ハーバーマスにとっての「翻訳」が、「あたかも『抽象的な』認知過程において必要とされるような、ある語を別の語と置き換える（あるいは回りくどくいいかえる）ことであるように思える」という点である。もう一つは、ハーバーマスの「翻訳」の考え方に従えば、「感性的な関わりの要求は、排除される」という指摘である。

なぜこの二つが重要かと問われれば、それは今回の冒頭で再確認したアサドの翻訳の捉え方に直結する内容だからである。すなわち、「翻訳」とは「純粋に認知的な行為」ではないという点、そして「特定の音や像、そこから生じる感情を想起させる表現の複合体であり、行動や態度を現実化するものである」という点である。純粋に認知的な行為に対置される形で「感性」、「感情」、「行動」、「態度」といった言葉が並べられているように、アサドの考える「翻訳」の射程はハーバーマスとは大きく異なるのである。

そしてアサドは、自分のものとは違った言語と向き合う時にとるべき態度について、以下のように論じている。

> もし言語がわれわれのこの世界での生き方の一部であるとすれば、異質な言語はわれわれの政治に対する啓示の源泉になり得るだけではない。なじみのない言語は、特定の生のあり方の具現化である。その曖昧さ―言語的な翻訳のしにくさ―は、その言語の貧しさや非合理性の証拠であり、それゆえ信用に値しないと考えるのではなく、聴取者や読者が、他の生の形態について想像し、それを生きることによって、われわれの言語の限界について考える機会であると考える時に、われわれの言語と同等になるということができるかもしれない。（同上：74–75、傍点は筆者）

ここではさらに踏み込んで、自分にとって「なじみのない言語」は、ある「特定の生のあり方」を具体的に表しているものであり、それが翻訳しにくいのは当該言語が非合理的なわけではなく、むしろそれは自分自身の言語で理解できる限界を示しているのであり、その他者の生のあり方を想像し、それを生きることによってこそ、はじめて同等の言語として翻訳が可能になるという意味とも捉えられよう。

［引用文献］

タラル・アサド（苅田真司訳）『リベラル国家と宗教―世俗主義と翻訳について』人文書院、2021 年。